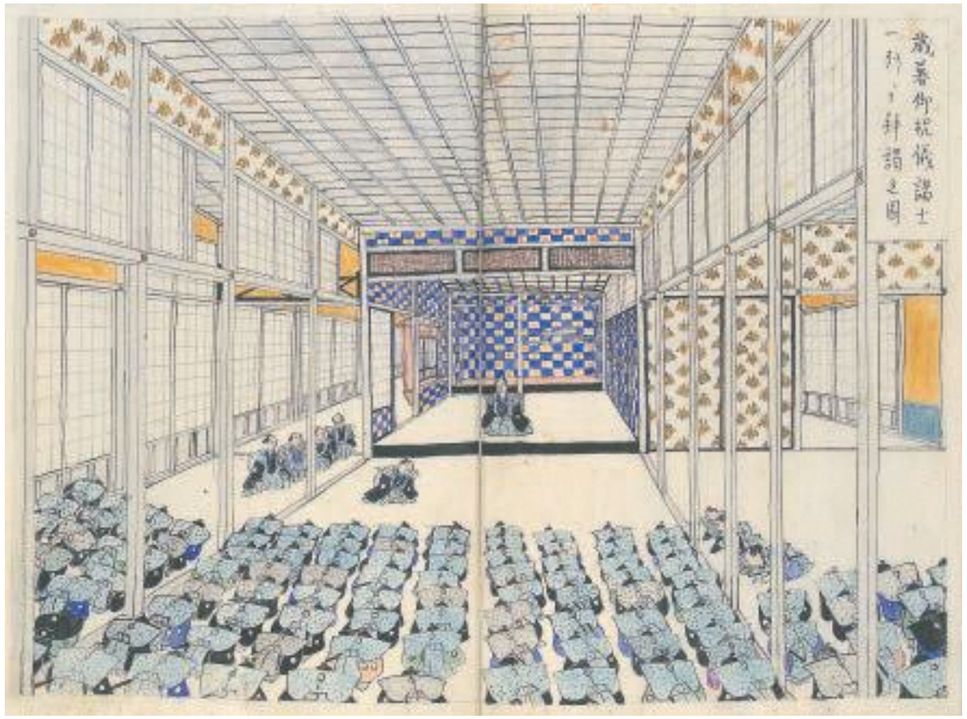
常在戦場の精神を受け継ぐ
長岡藩主牧野家十三代の治世二百五十余年

江戸時代は、長岡藩より大きな藩でも改易・転封などの憂き目にあい、どの藩も決して順風満帆とはいかなかった。しかし、そのなかで長岡藩は二百五十年余りにわたって、牧野氏がおさめた稀有な藩であった。決して安寧の治世といえない時代もあったが、戦国の三河で培われた質実剛健の気風はそのまま藩風となり長岡藩は大きく発展していった。



▲毎年12月25日に大組・御小姓組の諸士は麻の上下を着用した正装で長岡城本丸御殿で藩主に拝謁
（『長岡城之面影』、槇神明宮所蔵）

▲牧野忠成木像（普済寺所蔵）
牧野忠成（1581-1654）は、三河国牛久保（現愛知県豊川市）に生まれる。大坂夏の陣で戦功をあげ、大胡（前橋市）、越後長峰（上越市吉川区）を経て初代長岡藩主となり、幕末まで続く藩政の礎を築いた。

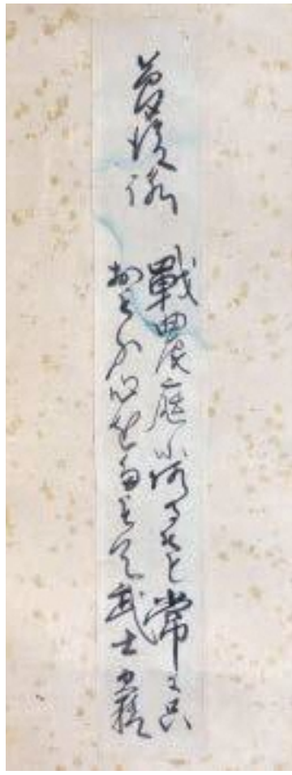
▲伝河井継之助書「常在戦場」
（長岡高校記念資料館所蔵）

▲十分盃（蒼柴神社所蔵）
貞享４年（1687）、牧野忠辰は十分盃をつくって、「すべて物事を行うにはゆとりをもって行うようにせよ」と家臣・領民に節約を説いたと伝えられている。

長岡藩のプライドをつくりあげた藩主牧野家

長岡藩主牧野家は三河時代からの藩風を保つため「牛久保の壁書」に十八か条の家訓を示した。その第一条「常在戦場のこと」は武士の心意気として、戦場での辛苦を忘れず、今日の安息に感謝する気持ちで忠勤に励むことを説いている。

初代藩主忠成はのちに藩の財源となる新潟町を整備し、堀直竒から続く長岡城築城工事を完成させた。三代忠辰は中興の名君といわれ、諸士法制を制定し藩内の諸制度を整えたほか、高田藩主改易の際、高田城の受け取りの大役を果たした。九代忠精は藩校崇徳館（そうとくかん）を開校した。幕政においては忠精、十代忠雅、十一代忠恭と続いて老中を務め、不安定な時代においてその重責を担った。



▶天明七年（一七八七）牧野忠精書「夢後詠」（戦の歌）（長岡市立中央図書館所蔵）
「戦の庭にあるそ（ぞ）と常に只（ただ）　おもふ心を　たもて武士（もののふ）」
武士たるもの常在戦場の精神を瞬時も忘れてはいけないと詠んだ。

▲第10代牧野忠雅（1799-1858）

▲第11代牧野忠恭（1824-1878）

▲第12代牧野忠訓（1844-1875）

▲第13代牧野忠毅（1859-1918）

長岡藩の歴代藩主

代数	藩主名	在任期間
初代	牧野忠成（ただなり）	1618 ～ 1655
2代	牧野忠成（ただなり）	1655 ～ 1674
3代	牧野忠辰（ただとき）	1674 ～ 1721
4代	牧野忠寿（ただなが）	1721 ～ 1735
5代	牧野忠周（ただちか）	1735 ～ 1746
6代	牧野忠敬（ただたか）	1746 ～ 1748
7代	牧野忠利（ただとし）	1748 ～ 1755
8代	牧野忠寛（ただひろ）	1755 ～ 1766
9代	牧野忠精（ただきよ）	1766 ～ 1831
10代	牧野忠雅（ただまさ）	1831 ～ 1858
11代	牧野忠恭（ただゆき）	1858 ～ 1867
12代	牧野忠訓（ただくに）	1867 ～ 1868
13代	牧野忠毅（ただかつ）	1868 ～ 1870

西暦	和暦	記事
一六〇九	慶長十四	牧野忠成、牧野康成の跡を継ぎ大胡城主となる
一六一四	慶長十九	牧野忠成、大坂冬の陣に参戦
一六一五	慶長二十	牧野忠成、大坂夏の陣に参戦
一六一六	元和二	牧野忠成、越後長峰五万余石に移封、長峰城築城
一六一八	元和四	堀直竒が越後本庄（村上）へ転封 牧野忠成、初代長岡藩主となる
一六七四	延宝二	牧野忠辰、第三代長岡藩主となる
一六七七	延宝五	「長岡町中掟」と「覚」二八か条、「郷中守書」「駅場条目」を制定
一六八一	延宝九	牧野忠辰、高田藩主改易に際し、高田城受け取り
一七五三	宝暦三	山本老迂斎、「牧野家譜」を編修
一七五四	宝暦四	長岡城本丸（三蔵火事で焼失）を再築
一七六六	明和三	牧野忠精、第九代長岡藩主となる
一七七一	明和八	牧野忠辰に蒼柴大明神の神号を贈進
一八〇一	享和元	牧野忠精、老中に就任
一八三一	天保二	牧野忠雅、第十代長岡藩主となる
一八四〇	天保十一	幕府、長岡藩に川越転封（三方領知替え）を命令
一八四一	天保十二	幕府、三方領知替えを中止する
一八四三	天保十四	幕府、長岡藩に新潟町の上知を命令
一八四三	天保十四	牧野忠雅、老中に就任
一八五七	安政四	牧野忠恭、第十一代長岡藩主となる
一八六三	文久三	牧野忠恭、老中に就任
一八六六	慶応二	第二次長州征討に出兵
一八六七	慶応三	牧野忠訓が家督を相続し、第十二代長岡藩主となる
一八六八	明治元	新政府が牧野鋭橘（忠毅）の相続を許し、長岡藩の再興を許可